

知的財産事例

株式会社シェルタージャパン

災害復興の経験から「津波に耐えられる核シェルター」を開発 パイオニアとして“防災”の機能に留まらぬ可能性を広げる

事業内容

1996年創業
避難シェルター開発・施工・販売
産業用太陽光 開発・施工・販売・メンテナンス

知的財産権と内容

特許第6842773号	避難装置及び密閉空間用生命維持システム
特許第7649583号	シェルター用避難梯子
特許第7538573号	シェルター用吸気装置
特許第7513337号	シェルター室内冷却・除湿装置
商標第5964234号	シェルタージャパン

特許権83件、商標権19件

(2025年9月現在)

ACTIVITIES & ACQUISITION IS INTELLECTUAL DATA



代表取締役社長 矢野 昭彦さん

様々な災害復興の経験から 「命を守る」独自のシェルター開発に乗り出した

矢野社長は阪神淡路大震災が発生した翌年の1996年、災害復興を果たすべく当社を創業した。1999年の豊橋竜巻や2000年の東海豪雨をはじめとする、国内で起こる様々な災害の復興工事やボランティア活動を含め、1万件以上の新築やリフォーム工事、太陽光発電所建設工事を手掛けてきた。そして、2011年の東日本大震災発生から2か月後、被災地の復興ボランティアで「災害から1つでも多くの命を守るには、避難場所となるシェルターが必要だ」と考えた矢野社長は、まずスイス製のシェルターの普及に着手した。しかし、海外と日本の環境の違いから、スイス製製品には大雨や津波から守るための防水性能が付いていないことが課題となり、普及を断念。そこで、それまで建築業で培われたアイデアと技術力を活かし、自らシェルターを開発しようと乗り出した。開発にあたっては、かねてから知り合いであった、優れた防火扉を持つ薪ストーブを開発した職人に協力を仰ぐなど、過去の人脈が発揮された部分も多い。そして2025年5月、ついに長年の努力が実り、地震や煙、水を検知し、自動で扉が閉まる高い防御力を誇るシェルター『ガイアバステイオン』を完成させることに成功した。

大学との連携が特許の取得や 知財への意識を変革するきっかけに

「はじめは新しい発想だという自覚がなく、特許を取れると思っていなかった」という矢野社長。しかし、2012年にシェルターの第1号が完成した際の見学会で、購入を断念した顧客から「製品の魅力は理解できるが、命に関わるものである以上、技術的な保証がほしい」と言われたことが契機となった。まずは正確なデータや数値を測るべく、研究設備を持つ大学へ足を運んだ。そこで縁が生まれた教授から知財の取得を勧められ、紹介を受けた弁理士のサポートのもと、初めて特許を出願。「特許は開発製品の全体のみならず、部品などの細かい部分の技術でも認定される」ということを知る機会にもなり、アイデアを知財という形にすることへの可能性が広がった。これまで22ヵ国での国際特許、83件もの国内特許を取得したほか、2021年には日本弁理士会から「知的財産活用奨励賞」を受賞するなど、積極的な知財活用が評価されている。

特許の取得により問い合わせが増加 今後は模倣対策としての活用も期待される

直近の8月にも4件の特許を出願するなど、精力的に出願を継続している当社。技術的な部分でも独自性を証明できるようになったことで、知財取得後には問い合わせが急増したという。また、シェルターの開発に要する費用について金融機関へ相談することもあるが、特許取得により金融機関からの信頼度も上がったと感じているようだ。当社はシェルター分野のパイオニア

ということもあり、「現時点で業界内では模倣が生じる段階ではない」と矢野社長は話す。現在は他者による模倣について十分なチェックができていないというが、今後シェルターの普及に伴い、『権利保護』の観点からも特許を活用する必要があるため、体制を整えていく予定だ。ゆくゆくは海外市場にも自社のシェルターを展開すべく、戦略的に知財を活用したいという。

知財取得における苦悩



まったくの新規分野に乗り込んだゆえ、はじめは道のりの不透明さから、特許技術の研究開発にはかなりの時間を要した。それにより製品化が遅れた面もあったため、専門家との連携強化などの重要性を感じたという。また、複合災害大国・日本に適した“シェルター”の普及が課題である中で、「実績を作る」ことも大きな壁となって



津波に耐えられる核シェルターは金庫の役割も果たす



スマホでの開閉操作や地震・水害・火災を感じる生命維持装置の心臓部

いる。これに関しては具体的なシェルターの必要性や快適性を伝えるYouTube動画の制作や、実物が分かりやすいようホームページを改良するなど、ネットも活用しながらプロモーションを行っていく方針だ。

知財取得を目指す経営者へのメッセージ



「世の中には“もったいない”技術がたくさんある」と矢野社長は話す。「高い技術力を持っているものの、上手く発信できていない職人も多い。知財やITツール等を駆使し、次の世代に残せるように頑張ってもらいたい」と。また、「特許技術を開発できても、製品化にはまた別の課題が存在する。技術者同士が協力してお互いの長所を活かせるようなマッチングの場があれば、とも思う」との展望も語った。



車いすアイドルの「仮面女子」猪狩ともかさんが「核シェルターの社会的意義は大きい」とシェルタージャパンの応援に駆け付けてくれた



知的財産活用のポイント

「命を守る」機能だけではなく、製品の改善に向き合った結果が実った

「アイデアは自然と出てくる」と話し、様々なシェルターの開発・活用を進めている矢野社長。例えば、最新製品の『ガイアバステーション』は、創業以来の課題であった扉のバリアフリーや室内生命維持装置の問題を解決した製品である。こうした問

題解決のためには、社長や社員が実際に数日間シェルターに入り、確認するなどの手間も惜しまないという。災害復興という厳しい状況を経験したからこそ、“命を守る”ことだけではなく、製品全体の機能性の向上に全身全霊で向き合ってきた。その信念が、地震や津波、火災といった状況でも快適に避難ができる核シェルターの完成に結び付いている。矢野社長の発想力、そして行動力が、特許として形ある財産となった。

COMPANY DATA

取材：2025年9月

企業名：株式会社シェルタージャパン 所在地：静岡県浜松市中央区長鶴町141-1 電話番号：053-545-9341

URL：<https://shelter-japan.jp/> 創業：1996年 資本金：2300万円 従業員：15名

